

文学と社会における「近代」に関する研究

A Study of Modernity in Literature and Society

総括研究員：植和田光晴

分担研究員：石川實 植和田光晴 神崎ゆかり 木村英二 長谷川年光 山元哲朗

このプロジェクト研究は上記の総合テーマについて、「モダン」研究会の略称のもとに、月一回の定例研究会を設定した。各分担研究員は、原則として、この定例研究会において順次、個別的な研究テーマにつきその研究経過あるいは成果を発表した。出席者は、それに関して感想を述べ、討論をおこなった。以下にこの1年間に得られた成果のレジュメを列挙して中間報告とする。(50音順)

石川 實：映画の理念

映画の理念は技術の産物ではない。画像の演劇の理念は、18世紀半ばにすでにディドロによって提示され、70年代の新しい演劇にはその実現の試みが見られる。19世紀末のハウプトマンの自然主義劇は、この流れを受け継いで徹底化したものだ。台詞を一切用いず、身振りと表情だけで心の内奥を描き出す場面の、詳細を極めたト書きに内在しているのが、画像の演劇の理念であることは、そこに見られる表情の微細な描写が、クローズ・アップによってのみ可能であることから明らかである。映画の理念は技術に先行していたのだ。(「言葉の無力と無声映画の誕生」として1994.5.31.定例会で発表)

植和田 光晴：S. フイエッタ著『文学的モダン』の「言語危機」について

初期近代の合理論と、そこから帰結する自然・事物世界に対する人間の権力-支配要求に対して、初期の「文学的モデルネ」の作家たちは深刻な懐疑を表明した。彼らはまた、近代の主観哲学理論が免れ得ない主-客(=人間-自然)間の疎隔・齟齬を、普遍的、統一的な根底へと取り戻そうとする。ニーチェは、この認識危機の責が言語そのものにあることを洞察した。すなわち「文学的モデルネ」にとっては、これら近代の認識の危機は、言語危機の一樣相にすぎない。ヘルダーリン、クライストからホーフマンスタール、そして現代へと、この言語危機はますます尖鋭化される。(1995.8.定例会で発表)

神崎 ゆかり：ビアスの短篇小説にみられるモダニズムの要素について

19世紀のアメリカの短篇作家アンブローズ・ビアスは、その作品にみられる写実的描写ゆえにリアリズム作家とみなされがちである。しかし、彼自らがそのことを否定しているように、ビアスの作品は写実主義的19世紀の伝統を断ち切ったモダニズムの洗礼を受けていると言える。そこで、モダニズムの代表的アメリカ作家ポーの短篇小説論とビアスの短篇小説論を比較することによって、彼がいかにポーの影響を受け、それを自らの作品において実践し

ているかを考えてみた。それによって、ピアスの作品におけるモダニズムの要素を明らかにすることを試みた。(1994.9.27.定例会で発表)

木村 英二：「モデルネ」における「二重の死」について

本年度は、前回のプロジェクト研究「二つの世紀末における文学と社会」での成果を受けて、「文学的モデルネ」の捉え直しというテーマに取りかかった。具体的には従来、文学史において「文学的モデルネ」という概念で捉えられてきた19世紀末から20世紀にかけての世紀転換期の文学を、「巨視的時代区分」と「哲学的ディスクールとの関連」という二つの側面から新たに考察する試みをはじめた(1994.11.13.クヴェレ会例会で発表)。論文：初期表現主義における「近代」批判 — 「文学的モデルネ」の捉え直しに向けて — (大阪産業大学研究叢書に投稿中)。

長谷川 年光：フェノロサ、パウンド、イェーツ — 能とモダニズム —

フェノロサが長短三度にわたる滞日で得た謡曲、能楽研究の成果は、フェノロサの能論としてエズラ・パウンドンによって整理・編集され公刊された(1916)。また日本固有の能芸術は、パウンドを介してイェーツに受容され、その能論(1916)となり、またそのドラマにおいて、能の影響により、象徴性の高い諸作品が創られた。すなわち能とモダニズムの出会いと融合である。上記の過程が、フェノロサの日本での生活と活動、彼の能=演劇観とともに詳細に論じられた。(1994.11.29.定例会で発表) — 付記：この項は植和田が記した。 —

山元 哲朗：ヘルダーリーンとロマン派における「モデルネ」

キリスト教的中世への憧憬を特徴の一つとする初期ロマン派の一連の作家たちと異なり、ヘルダーリーンは近代の淵源を中世に求める姿勢を見せてはいない。しかし、近代固有の詩的表現である一連の「祖国の歌」の確立を試みながら、近代の刻印としての芸術のかたちを追求しつづけるヘルダーリーンの姿勢には、近代固有の芸術の確立を目指したシュレーゲルと呼応し、時代の反映としての近代芸術への可能性と壮大な詩的世界の構築に、全霊をかたむけて立ち向かい、絶え間なく格闘する崇高な精神の軌跡を見ることができよう。